華厳経における寂滅道場と祇園精舎

——法蔵の解釈を主として——

山田亮賢

一

漢訳六十巻『華厳経』並びに八十巻『華厳経』は、共に一経典の形態をとりつつ、二つの異なる説法の会座を基本として展開せしめている。その一は「寂滅道場」であり、他は「祇園精舎」である。伝統的に佛最初の説法と言われているこの『経』が二つの異なる会座をもって出発していることは如何にも矛盾しているように思われる。常識的に見れば明らかに矛盾していることが何ら問題とされずに編纂されていることが、却ってこの『経』の妙味と特色を発輝しているとも言い得るのである。この寂滅道場（菩提道場）と祇園精舎を華厳宗を大成した法蔵はどのように理解したであろうか。今は法蔵の卓越した見解を指南として、この『経』における説法の根本の場を考察し、問題の所在を多少とも明らかにして見ようと思う。この小稿においては、法蔵の見解を中心とするために煩を避けて晋訳六十華厳によって『経』意を求めることとした。

「寂滅道場会」は、全華厳経の最初の会座であり、それが根本でもあり、『経』の序説でもあると言い得る。その

意味において、この『経』としては「寂滅道場会」に特別の関心を向けるべきである。従来、『華厳経』と言えば、一般に直ちに菩薩道の修行の進修階位を問題とすることに慣らされて来た。それは「十地品」を中心とすることから当然と言えるであろうが、しかしその菩薩道を成立せしめる基本となるものを看過してはならない。そのことに着眼すれば、「寂滅道場」の会座の内容と、更にそこから直ちに展開する「普光法堂」の会座のそれは、軽々に看過することの出来ない極めて重要な意義を持つものと言い得るのである。この観点からして先づ最初の二会を根本的なものとして、何が説かれたかを求めて見よう。

寂滅道場は所謂菩提道場である。佛陀がそこにおいて正覚を成ぜられ、われらの地上においてはじめて佛として誕生せられた場である。佛教的立場からすれば、そこに於いてこそ人間世界に黎明が訪ずれたことを意味する重大な事実が存するのである。この『経』の後に説かれる「宝王如来性起品」においては、如来の出現ということが詳説されているが、この『経』の最初に、寂滅道場の深い意義が説かれることによってこそ、却って「宝王如来性起品」の中に詳説される意義が明らかになって来ると言わねばならない。この『経』の冒頭の言葉は、

「如是我聞、一時佛在摩竭提国寂滅道場始成正覚」

である。ここに既に佛の誕生、如来の出現を強調しなければならない根本の立場が知らされるのである。而して佛陀出現の場は、それこそ、全世界の重大な場であり、そのことがまことに鮮やかに、「地」「樹」「座」の三事を以て象徴的に表現せられているを見るのである。この最初の「地」「樹」「座」の三事を以て佛の座を表わさんとするところ、そこにわれらの常識を超えた巧みな方法を以て、具体的に如来出現の意義を表明せんとする意図が強くうかがわれるのである。『経』に説く「地」「樹」「座」は次の如くである。

「其の地は金剛にして厳浄を具足せり。衆宝雑華を以て荘飾となし……

佛の神力の故に、此の場地をして広博厳浄ならしめ、光明普ねく照し、一切希特の妙宝積聚し、無量の善根もて

道場を荘厳せり。

其の菩提樹は高頭殊特にして、清浄の瑠璃を以て其の幹となし、妙宝の枝条は荘厳清浄にして、宝華の垂布すること猶し重雲の如し。……

不可思議なる師子の座は、猶し大海の如し。諸の妙宝華もて厳飾となし、流光は雲の如く、周徧して普ねく無数の菩薩大海の蔵を照し、大音遠く震い、不可思議なる如来の光明は摩尼尊を踰えて其の上に弥覆し、種々に変化して佛事を施作し、一切悉く都て罣碍する所無く、一念の頃に於て一切現化して、法界に充満し、如来の妙蔵徧ねく至らざるなく、無量の衆宝は宝台を荘厳せり。」

この『経』文からして、「地」「樹」「座」が如何なる意味をもつものであるかが知らしめられ、われらの地上において、それが特別な意味を持つ場であることが明らかにされている。

法蔵は『探玄記』（巻第一）において、一、道場の地を明し、二、地上菩提樹あり、三、樹下に師子座ありと言い、地は行所依の本、覚樹は行徳の建立、座は行用の摂益と解説している。佛陀は地上に出現し、その場地はこのように荘厳せられたのである。この場地に佛座が定まり、そこからこそ佛が衆生教化の大用をあらわす根本の場となったのである。また法蔵は『般若』や『法華』の「教起因縁」を述べると共に、この『経』の「教起因縁」を後に説かれる「宝王如来性起品」の文を以て力説しているを見る。即ち

「如来、応供、等正覚性起の正法は、不可思議なり。所以は何ん。少因縁をもて、等正覚を成じ、世に出興したもうに非ず。十種の無量無数百千阿僧祇劫の因縁を以て、等正覚を成じ、世に出興したもう。」

と。如来の出現は、並々ならぬことである。その因縁は無数無量であり、思議を超えたものである。その如来が今やこの場地において出現せられた。佛座は偶然の座であったのではないのである。『経』には次に

「如来は此の宝師子座に処して、一切法に於いて最正覚を成じたまい、三世の法に平等なることを了り、智身普

ねく一切世間の身に入り、妙音徧ねく一切世界に至り、窮尽すべからざること虚空の如く、平等の法相、智慧の行処も猶し虚空の如く等心もて一切の衆生に随順したもう。其の身は徧ねく一切の道場に坐したまい、悉く一切衆生の所行を知り、……」

と説かれ、所謂、智正覚世間無量、衆生世間無量、器国土世間無量が説き起されている。

この師子座の如来は、正覚の場にありつつ、そのまま、その身は徧ねく一切の道場に坐したもうのである。この特定の寂滅道場の場地は、一なる地上の場所であるが、それは時間、空間を超えた一切の場地であり、一切の道場でもある。この『経』の会座は以下次第に展開し移動するのであるが、如何に展開移動しても、この寂滅道場を離れないという経説の意味は、この点からも領解出来ることである。

寂滅道場はこの『経』の基本であり、「地」「樹」「座」は佛陀正覚の背景であり、如来出現の重大な意義がかかる表現を以てなされていることに特別な着眼をすべきことを思わしめられる。

二

『華厳経』が晋訳、唐訳共に二部によって構成されていることは、周知のことである。即ち第一部の基本となっているものがこの「寂滅道場」であり、第二部の出発となっているものが「祇園精舎」である。このようにこの『経』の中に基本となる説所が二所ありつつ、それが全体的には一経として編纂されているところに特異な性格があるとも言える。そのことがまた経典の独特な価値を示しているとも考えることが出来るのである。

今、最初に問題としている「寂滅道場会」は、第一部経典の一会であるが、それはまた同時にこの道場における佛陀が全経を貫ぬくものである点よりすれば、以下展開する各「会」は何れも皆、「寂滅道場会」の意味を持つものと言えるのである。

しかし、直接的に見て、今、第一会としての「寂滅道場会」を考察すれば、「世間浄眼品」と「盧舎那佛品」とがその内容となっている。先ず一応、この『経』が「世間浄眼品」を以て始まる意義を考察するに、世間浄眼という言葉そのものが示すように、そこには明朗な歓喜の気運が全品に漲っていることを知らしめられる。佛陀の出現が全世界を明るく照らし、この道場に来集した人々を以て、その意味を示している。この無量甚深の意義を持った会座に来集した人々は如何なる人々であったか。それは天地自然一切法界の有情、非情を人格化して、そこに歓喜来集せしめたのである。言うまでもなく、普賢菩薩を上首としての無量の菩薩が来集したことは、先ず以て最初に説かれ、諸菩薩に次いで、諸神、諸天三十三衆が来集するのである。而して、それら諸大菩薩、諸神、諸天は皆無量無辺でありつつ、その「名」と「徳」とを持つことが一々述べられている。初めに大菩薩は皆、佛の「宿世の友」であったことを説き、その次に三十三衆が現われている。まことに驚異に価する広大な雰囲気がかもし出されているを見る。

最初の二品すなわち「世間浄眼品」と「盧舎那佛品」とが、正しくこの寂滅道場において説かれたのである。以下次々に会座の展開が見られ、所謂、七処八会三十四品の説法によって全経が一応の完結を為しているのである。この中、第八会が第二部の経典と見られるものであり、独立経典としても考え得るのであるが、漢訳に見られる六十、八十の二経は一経としての形を保たしめている。

第二会「普光法堂会」以下、第七会「普光法堂重会」に至る説法会座の展開に於いて最も注目すべきことは、「世尊は威神力の故に、此の座を起ちたまわずして」とか、「世尊は威神力の故に、道樹及び帝釈宮を離れずして」等、会座の移動毎に「寂滅道場」から離れないことが必らず説かれていることである。このことが「寂滅道場」の意義を考察するに常に念頭におかねばならない重要なことであると共に、この『経』の独特な性格を知る上にも極めて大切なことと思われる。換言すれば、寂滅道場を外にして華厳の会座は無いと言い得るのである。ここにこの『経』が佛の自内証を説いたものであるという根源の意味が明らかになると思う。寂滅道場と佛の自内証の境地とは二にして一

なるものと言い得らるるであろう。従って内容的には順次に菩薩道が説かれ、その進展が整然と段階的に示されても、結帰するところは、寂滅道場であり、佛の自内証である。

三

前述の如く、全『華厳経』の構造は、第七会を以て第一部を終り、第八会、所謂「入法界品」が内容的には第二部の形をとっている。『経』の内容は一応異なっているが、その展開の仕方が、第一部、第二部、相呼応している点が興味をそそられるのである。全『華厳経』としては、決して第一部、第二部と名づけているのではなく、あくまで華厳説法の会座の自然の展開の形式をとっているのであるが、内容的にはそれぞれ独立したものであり、ただ独立したものが呼応しているところに特徴があると言える。

従って法蔵は『探玄記』において、第一部、第二部と二者独立した経典とは見ていない。しかしその内容の展開は、自ずから呼応せしめて、その展開の仕方を同じ形において見ているのである。とは言え第一部と第二部とは各々異なった特色を持って居り、全く同じと言い切ることは出来ない。特に注目させられることは、説法会座の根本が第一部においては「寂滅道場」であり、第二部においては「祇園精舎」であることである。前者は菩提道場であり、後者は釈尊在世教団の根本道場である。このような佛教の歴史的重要な意義を持つ異なった地上の場所を対応せしめつつ、内容の基本的展開は自ずから軌を一にするものがあることに特に関心を向けさせられるものがある。

かかる特色を経典の形そのものから見るとき、経典の成立、その伝持、編纂、集大成ということなど多岐にわたるものが考えさせられる。根本精神においては一なるものが、二種の形式、形態を以て表現せられ、それがまた各々独立して流伝されていたことも事実であったであろう。第二部経典が別個に伝訳されたことは、それが『四十華厳』と呼ばれて独立経典として現存していることからも明らかなことである。

第二部経典は第八会「重閣講堂会」であり、「入法界品」である。

「爾の時、佛、舎衛城の祇樹給孤独園の大荘厳重閣講堂に在したもう。五百の菩薩摩訶薩と倶なり。普賢菩薩、文殊師利菩薩を而も上首と為す、」

の文から始まっている。法蔵によれば、此の一品は本会、末会に分たれると言う。

「此の一品の中に、大いに分つに二有り。初めに本会を明し、二に爾時文殊従善安住楼閣出已下は末会を明す。亦則ち前は果法界を明し、後は因法界を明す。又前は頓入法界を明し、後は漸入法界を明す。又前は総、後は別なり。即ち本末円融無碍なること之を思え。」(『探玄記』巻第十八)

このような見解に立って、文殊師利菩薩の南方遊行によって、本末の二会が分たれると見る。本末という見方が適当であるかどうかは別として、一応祇園林内の会座と、そこからの展開とを区別すれば、便宜上からも、本末二会として分別してもよいであろう。

この場合、本会は佛の自証の世界であり、末会はその展開である。前に挙げた第一部経典の「寂滅道場会」と呼応するものであり、説法の構造は一致するものがある。しかし他面、二者異なる点も見逃し得ない。即ち前の「寂滅道場」においては、佛陀の入定を説いていないが、ここには、佛陀が「大悲を首として、師子奮迅三昧に入り、一切衆生をして清浄の法を楽わしめたもう。三昧に入り已りし時、大荘厳の重閣講堂は忽然として広博なること無量無辺にして破壊すべからず。」と説かれている。佛自証法界は同じであっても、成道と教化の場との一応の区別が存するとも見られる。即ち益物の悲心が、ここに新たな入定となり、そこから大悲の大用を起すことを意味するものであろう。

更にまた祇園林には諸大菩薩と共に、諸大声聞なる舎利弗、目犍連等大弟子あることである。これらの大声聞が、「如来の自在を見ず」また「如来と対面して坐すと雖も、神変自在を覚知する能わず」と説かれている。ここに「祇園林」における佛陀釈尊と大声聞との関係を如何に見るかという「華厳」の立場の重大問題を見ることが出来る。如

来と対面しつつ、如来の自証の世界を覚知し得ず、皆聾盲の如しと批判されている大声聞は、全く大乗、一乗の立場から見れば佛意を解し得ないものということになる。ここに「祇園精舎」の会座そのものが、この『経』において問題とされる特別な意義あることが理解出来るのである。

前述の「寂滅道場会」においても、また、今この「祇園林」の会座においても説者は佛に代る普賢菩薩である。普賢菩薩が佛弟子、来集者の代表であって、所謂、舎利弗等の大声聞ではない。その普賢の願海から文殊菩薩の展開を見る形がとられている。特に「本会」「末会」に二分して見ることの出来る第二部経典の特色は、「本会」の普賢を背景として、新たに展開を始める「末会」の最初の文殊において見ることが出来る。そこにこそまた大声聞舎利弗との微妙な関係を打ち出している興味深い問題を見るのである。

四

「末会」に於いては、文殊菩薩が文殊師利童子の名を以て現われていることが注意される。他は皆一様に菩薩の名を以てされ、後に善財童子が善知識を歴訪する際、弥勒が文殊師利大善識と尊称していることと対比しても、ここでは文殊が外的に動きを示す特別な意味を持たせたことが知らされる。ここに現われた文殊こそは小乗佛教を批判せしめる大乗佛教教理史的な内容を孕んだ極めて興味ある表現がなされていると言えるのである。従って文殊が大乗智の象徴的存在であることを巧みな、また自然にその意味を理解せしめる方法がとられていることに気づかしめられる。ここでは全く創作的な物語の形式がとられていることもまた一特徴と言えよう。

「末会」は先ず「文殊師利童子が善安住楼閣より出ず」ということから始まっている。ここは明らかに祇園林の中である。祇園林の中にあって、安住せる文殊が、その安住楼閣より動き出したということは、意味深いことである。大乗智に安住せる文殊が、安住の場から一歩、歩をすすめて南方へ遊行しはじめたということは、大乗智が単に静処

に静観して安住し得ざる意味を教うるものと言えよう。文殊が楼閣を後にすれば、そこには同行の諸の菩薩も倶に現われ、金剛力士は常髄侍衛し、諸天、鬼神も佛を礼して、皆南方へ向うと叙述している。ここに文殊の南方遊行の並々ならぬ光景が画き出されていると言える。しかもその後に、尊者舎利弗が佛の神力を承けて祇園林を出でてまた南方へ遊行を始めるのである。この文殊に従って舎利弗が祇園林を出でたということは、直ちに佛教の歴史的展開の上に思いを起さしめる重要な意味を示していることを首肯させられるのである。舎利弗は佛弟子の上首であり、大声聞として智慧第一と言われてきた智の代表者である。文殊はまた菩薩として大乗般若智の代表者である。前者は声聞の代表であり、後者は菩薩の代表でもある。しかも智の性格においては共に同じである。このように同じ性格の代表者が登場し、しかも大乗智の象徴としての文殊の後に小乗智の舎利弗が随ったということは、佛教の歴史的発展の内面性を表現していることに気づかしめられるのである。このような代表的人物が登場して、その性格を明らかに表わしている他の経典としては『維摩経』がある。『維摩経』では在家の居士維摩詰が中心人物となって、大乗空観と菩薩の大慈悲とが説かれている。ここにも舎利弗と文殊が登場して、小乗智と大乗智の立場の相違を知らしめてくれるが、この「入法界品」の「末会」のそれと対比して見れば、異なった表現を以て相通ずるものあることが認められるのである。

舎利弗は六千の比丘の眷属に囲繞せられて「自房より出で」て、佛所に来詣し、文殊師利の後に向って行ったと説かれているが、法蔵がこの自房の意味を説明して「自房より出ずとは、小涅槃を捨つることを表わすなり。文殊に向うとは、一乗の道に趣くことを表わすなり」（『探玄記』巻第十八）と言っていることは、まことに適切な理解であると言える。文殊現われて、今こそ舎利弗は小涅槃を執することを捨てたのである。それは声聞道より大乗一乗道へと、立場の転換が行われたと言える。すなわち、大乗道こそ声聞道を自ずから導き、誘引したのである。声聞道が先立つのではなくして、大乗道の後に随ったことになる。

六千の比丘は舎利弗の共行の弟子である。その弟子の代表者は海智比丘と名づけられ、舎利弗がその海智比丘に告げた言葉は、実に文殊を発見したことの驚ろきと歓こびであり、全く文殊の全姿を具体的に表現している。文殊の徳を教理的な説明をしたのではなく、その智徳を眼にうったえて讃えているのである。

「汝は、文殊師利菩薩の清浄の身は相好荘厳にして、一切天人の能く思議すること莫く光明円満にして無量の衆生をして歓喜の心を発さしめ、大荘厳の光明の網を放ちて、衆生の無量の苦悩を除滅するを観察すべし。

其の眷属の善根を成就するを観ぜよ。

其の遊歩は、威儀庠序にして、所遊の行処は、自然に平正にして十方無碍なるを観ぜよ。

其の功徳所行の道路は、其の傍らに悉く衆妙の宝蔵有りて、自然に発われ出ずるを観ぜよ。

其の過去の諸佛を供養したる善根の依果は、衆の林樹より荘厳蔵を出すを観ぜよ。彼の一切諸天の大王の恭敬し礼拝して供養したる雲雨を観ぜよ。

海智よ、汝、文殊師利を観ぜよ。一切の如来の眉間の毫相より無量の光を放ちて諸佛の法を説き、悉く其の頂に入るを。」

五

舎利弗の心眼に映じた文殊遊行の全姿は、人間の常識的世界に見られるものではないであろう。否、小乗智においても未見のものである。今や舎利弗は大乗智において内的に荘厳された文殊の姿に驚歎し、その堂々遊歩の輝きに眼を瞠ったのである。法蔵はこの舎利弗が海智比丘に観ずることを勧めた文を、最初の六は、文殊の自分の勝境を示すものとして、一、身光の勝、二、眷属の勝、三、威儀の勝、四、行処の勝、五、依果の勝、六、供養の勝と見、後の一を勝進の勝境として、加持の勝と見ている（『探玄記』巻第十八）。この解釈は何れも適切なものであると言える。文

殊の勝境は、今はじめて知らしめられたのである。それは文殊の智の身光に照らされた世界である。その世界は単なる知識の世界ではなくして、未見の世界が新たに発われ出でたのである。それこそ実相の世界が輝やき出でたと言ってよいであろう。更に舎利弗は諸比丘のため、文殊の無量の功徳を讃説し、諸比丘はその言葉に歓喜したのである。ここにおいて文殊は改めてこれら諸比丘に発菩提心を説き、特に普賢行を修し、普賢行に住することを勧説したのである。

さきに舎利弗が讃説することによって、諸比丘ははじめて文殊を知り、文殊の所に詣でて、文殊を礼拝合掌し、共に心に念ったその所念の内容を『経』文の中に注意して見ると、

「我等、此の礼拝の功徳を以て、法の実相を知ることは、和尚舎利弗、釈迦牟尼世尊の如く、清浄の身と相好音声と神力自在を得ることは、文殊師利の如くならん。」

と説かれている。ここに諸比丘大衆の新たな願いが生じているを見る。その願いの中に、法の実相を知るということと、清浄の身、神力の自在を得ることとが表われている。ここにも諸比丘大衆の謙敬の願いが見られ、舎利弗、釈尊と文殊への尊敬の念が美しく発露しているを見る。

法蔵は「初めに知法を願うは涅槃を得るを以て、後に身相等を願うは菩提を得るを以てなり。前の中に如舎利弗とは、生空の実相に約し、釈迦とは、法空の実相に約するなり。又釈すらく、舎利弗の所依の釈迦の如しと。此れ即ち舎利弗を挙げて而も釈迦を取るなり。」（『探玄記』巻十八）と教理的な説記を与えているを見るのであるが、釈迦の教説を知法の教、涅槃を得る道として尊敬し、更に文殊に随って佛意に還り、菩提を得ることを願うということは、佛教の伝統を尊び、新たに伝統の根源へ還りゆくことを願ったことになるであろう。

法蔵の所説によれば、舎利弗は釈迦の弟子として生空を説いた人である。而して智慧第一の尊称を受けている。それは小乗智と言われようとも、佛弟子の権威を保持するものである。それ故にこそ、舎利弗が真先に文殊の身光に衝

たれたのである。舎利弗なればこそ、文殊の大乗空智を理解し得たのである。舎利弗の理解は、自ずから諸比丘の理解へと進展せしめたのである。この諸比丘の所念は正しい。ただここに注意すべきことは、舎利弗から文殊が現われたというのではないことである。真実には文殊こそ舎利弗以前の菩薩である。文殊精神に於いてこそ、舎利弗の存在の意義があり、従ってまた舎利弗は文殊の徳に摂せられるのである。

舎利弗は文殊を追うて、諸比丘と共に文殊に摂せられ、今や文殊は在家の新たなる求道者善財童子にめぐり会い、ここに現われた大菩提心の象徴とも言うべき善財こそ、文殊の念ずる新生の菩薩であったのである。大乗智の象徴とも見られる文殊が過去に舎利弗を見、未来に善財童子を発見したということは、まことに佛教の歴史を内面的に示す意義深いことと言わねばならない。文殊は「末会」において善財童子の求道全体を貫く善き指南の役を果し、しかも普賢行を限りなく勧めることを以て終始しているのである。

翻って思うに、第一部経典に於いては、文殊が、「寂滅道場会」の直後「普光法堂会」に現われて、信の立場において、そこに菩薩道の所依となる道を説くことと合せ考えさせられるものがある。

六

『華厳経』は普賢行を強調し、内容的には普賢に始まって普賢に終ると言ってもよい経典である。ここに「寂滅道場」と「祇園精舎」の二聖処を問題として取り上げたのも、根本は佛自証の境地を開顕せる普賢の行願が根本であることを念頭においてのことであった。そしてこの二聖地における主役となるものは、佛の威神力を被り、佛に代って説く普賢菩薩であることは言うまでもないことである。経説の内容は実に豊富であるが、その展開して行く過程は、普賢を背景としての文殊精神の具現であり、その文殊が限りなく普賢へ帰りゆく道を表わしているのである。このことを法蔵は特に留意して、「入法界品」「末会」に登場する二者の内面的関係を明瞭に教えている。

「二位を摂すれば、此の五十五会は二主に統収す。初の文殊より後の文殊に至るは是れ文殊の位、般若門に属し、後の普賢の一位は法界門に属す。般若に非ざれば、以て法界に入ること無し。是の故に善財創めて文殊を見る。法界に入るに非ざれば、以て般若を顕わすこと無し。是の故に善財終に普賢を見、是の故に二人を二位に寄せて以て入法界を明す。又、前の文殊は則ち法界甚深の義、後の普賢は法界広大の義を顕わす。是の故に二門相影して具徳す。」（『探玄記』巻第十八）

この法蔵の説明は、「入法界品」の「末会」全体を通じて見る二菩薩の関係をよく知らしめてくれるのである。文殊の般若門を得ずして、正しく普賢の法界門に入ることは出来ない。また法界門に入る実践行なくして、般若門に止まることは、真の般若ではなくして、般若の固定退転を意味することとなる。ここに般若門、法界門と区別すれば、二者相対することのように見られるが、その相対は一応のことであって、二者相融するところに、真の般若門、法界門何れもが成立するのである。般若門の文殊を離れた法界門の普賢なく、法界門の普賢を求めずして、般若門の文殊は無い。「入法界品」の「末会」において見られる二菩薩の関係が最もよく二菩薩の本来の意義を知らしめてくれるのである。前にも触れたように、「末会」は「本会」を根本として展開したものであり、「本会」が、佛自証の境地としての法の開顕であるに比して「末会」は具体的に物語の形式を以て人によって説かれているため、最も鮮かにこの二菩薩の内面的関係を知らしめられるのである。それはまた翻って第一部の経典に於いてもまた同様なことが見られるのである。ここでは理解し易い法蔵の所説を以て「末会」に見られる二菩薩の関係を取り上げたに過ぎない。

しかし『経』に於いては、文殊も亦普賢に帰入するものとして、普賢が優位におかれていることを見逃し得ない。文殊は能証の智、普賢は所証の境を表わしている。従って文殊は、自から、普賢を求め、普賢に没入し、普賢の中に生きるとも言える。「入法界品」において、文殊は求道者善財童子に普賢行を求めることを勧めるが、決して、自己に追従し、我に道を求めよとは言わない。あくまで文殊は指南の役に立ち、普賢への道を指し示す。ここに文殊の立

場と普賢との関係が如何なるものかが如実に現われているとも言えるのである。かかる観点からしても、この『経』は全体を通じて、普賢行を説く『経』であると言えるのである。

文殊と普賢との関係を佛教の所謂歴史的教理展開の上からすれば、『般若経』の思想から『華厳経』の思想へと言うことも言えると思う。更に『華厳経』こそは、この教理の必然的展開を『経』の内に示しているとも言えるのである。絶対否定の空思想から、一切衆生の自覚を願う普賢行への自ずからなる展開は、般若の真実の実践を具体的に顕現せしめたものであることが知らしめられる。

第一部経典の「寂滅道場」においては、普賢が上首として現われている。また第二部経典の「祇園精舎」では普賢、文殊と二聖並んで上首として登場しているを見る。上首として登場しているこの二菩薩がこの『経』において最重要な役割を果すべきことが、この点からも窺われるのである。

改めて考えるに、この『経』は、第一部の「寂滅道場」と第二部の「祇園精舎」の二箇の説所が普賢を以て代表せしめられているところに、根本の意が注がれていると思われる。『華厳経』は菩薩道を最も組織的に整然と説き、その修習の進展がまことに明瞭ならしめられているが、それは菩薩を以て代表せしめて見れば、普賢→文殊→普賢ということになる。即ちこのような展開の仕方によって、菩薩道の背景と未来の展開、その帰趣が表わされているのである。そしてこの菩薩道の根底に恒に存するものが「寂滅道場」と「祇園精舎」における佛自証の世界である。

佛最初の説法と伝承されて来た『華厳経』が「寂滅道場」と共に、「祇園精舎」を以て会座の根本とし、また佛弟子大声聞の舎利弗の登場の如きことは、常識的には誰しも理解し難いことである。然るに法蔵は、『華厳経』の特性を充分に領受し、その所謂歴史的矛盾を超えて、『経』意の本質的なものに参入しているを見る。『華厳経』の開顕せんとする本来的立場からすれば、「寂滅道場」並びに「祇園精舎」は、歴史的時、空を超えてそれぞれ、佛意の根源を象徴していると言い得るのである。